

特集 最近の果樹品種の動向と導入上の留意点

1 兵庫県産の果樹産地の特徴と品種導入の考え方

本県では南北に長い自然立地を活かし、但馬地域のナシから、丹波地域のクリ、播磨地域のブドウ、阪神地域のイチジク、さらに淡路地域のカンキツ、ビワに至るまで多岐にわたる果樹が栽培され、それぞれの地域特産物として重要な位置付けがなされてきた。

いずれの果樹とも、かつては市場を通した販売が主流を占めていたが、近年はイチジクを除き、市場外流通の比率が年々高まる傾向がある。消費地に近い立地条件を活かし、沿道直売や宅配をはじめ、観光農園やオーナー制果樹園など多種多様な取り組みがみられる。

販売ルートが市場出荷の場合と観光・直売等の場合とでは、品種導入の考え方も異なる。前者では産地としての市場評価を維持するために、特定の品種で一定の販売数量を確保する必要があり、また、食味、外観、日持ち性等で総合的にバランスのとれた特性を持つ品種の選定が要求される。一方、後者では多品種少量生産も可能で、必ずしも総合評価の高

い品種を選ぶ必要はない。例えば、外観や日持ち性などに多少難点があっても、食味に特別すばらしいものがあれば導入品種の候補になりうる。特に観光・直売の場合、一般の市場では得られない一味違った特徴のある果実が求められる傾向があり、これらの視点からの品種選定も考えられる。

その他、新しい品種を導入の際に念頭に置いておきたいのは、収穫時期である。できるだけ既存品種と重ならないものを選び、販売期間の拡大と栽培管理労力の分散を図りたい。また、苗木の購入に当たっては、信頼のおける業者を選び、優良な苗木を導入する。カンキツやナシ、カキ等では、新品種の穂木が入手できるならば、高接ぎによる品種更新が未収益期間を短縮する上で有効である。

本特集では主要な樹種について、有望視されている品種の特性と導入上の留意点を紹介した。それぞれの経営目標を考慮に入れて、品種導入を図る上での参考資料にしていきたい。

濱田 憲一（農業技セ・園芸部）